

安心・安全

深い学び

心と体の健康

2022
10

作成：士幌町教育委員会

「協同」から「協働」へ

2008年版学習指導要領では、「多様な情報を活用して協同的に学ぶ」「異なる視点から考え協同的に学ぶ」「力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ」と「キョウドウ」は全て「協同」と表記されていました。「協同」は「協力・同じ」です。

一方、2017年版学習指導要領では、「多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだし」「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む」「子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか」と「キョウドウ」は全て「協働」と表記されます。「協働」は「協力・働く」です。

さらに2021年中教審答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』では、「個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる」と示されました。

過日、こども園の3歳児クラスで自由制作を行っていた時、二人が別な色を塗りたい場面が。すると二人が納得の上、それぞれ好みの色を塗ることにしたのです。そして、結果ステキな仕上がりとなり、二人とも大いに満足した、という実践事例がありました。保育者が指示したり、ジャンケンで決めさせたりせず、互いに納得の上で好みの色を塗り上げた営みは、単に「協力して同じこと」をするのではなく、「協働的」に納得解・最適解を見つけ出した活動となりました。

多様な他者と協働する。あらゆる場面で今後求められる「資質・能力」です。子どもたちに求めるのであれば、まずは私たち大人から、ということですね。



青春ってすごく密なので。

これは、第104回全国高等学校野球選手権で優勝した仙台育成(宮城)の須江航監督の優勝インタビューでの言葉ですね。非常に多くの人の共感を生んだセンスある言葉でした。

今、急速な情報化の中で、一方では「国語力」の低下が深刻です。『ルポ 誰が日本語を殺すのか』の著者石井光太氏は、家庭でもできる国語力養成5例を①リアルな対話や読み聞かせ～親とのリアルの関係性の中で一緒に未知の世界を疑似体験する②言葉の多様性を知る～言葉のいろんな意味を覚えて育てて大きくしていくもの③思考を磨く～言葉で思考する習慣がないと「クソ」「もう嫌」と言い放って終わってしまう④異なる価値観に触れさせる～いろいろな価値観に触れさせると視点が多様化し関心が広がる⑤感情のグラデーション化～悲しみの感情を「死にたい」と極端な言葉で表現せず、的確な言葉で把握できれば感情にあった行動ができる、と述べています。



また、石井氏は心理学の「9歳の壁」という概念を引用し、国語力も9歳までの獲得が以降の勉強や人間関係に大きく影響すると述べています。家庭、学校、地域が総がかりで、小さな子どもたちの国語力を育まなくてはなりませんね。先の須江監督のような心に響く素敵で、子どもたちを支えていきたいものです。

◆上の石井氏は「国語力が養われていない状態で子どもたちはSNSの短文テキストコミュニケーションや、言葉がほとんど存在しないゲームに没頭する。しかも、そこで飛び交う言葉の多くは、生きていく力としての国語力に求められる言葉とはかけ離れたものです。」と述べています。◆私も「それな」とか「りよ」なんてやってるもんなん。反省！◆でも「長文・絵文字」は「おやし構文」というらしい(笑)。
◆「インプットした情報を二十四時間以内にアウトプットすると、その定着度は格段に向上する」という話を聞いたことがあります。◆ですから「今日学校でね…」という家庭での会話は、とつても大事なことです。◆学校の授業でも「〇〇に説明しよう」という課題が増えてきています。◆家庭で今日学んだことを喜々として説明するなんて姿は最高ですね。◆お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんな子どもたちの話を、いっぱい聞いてあげてくださいね！ (渋谷)